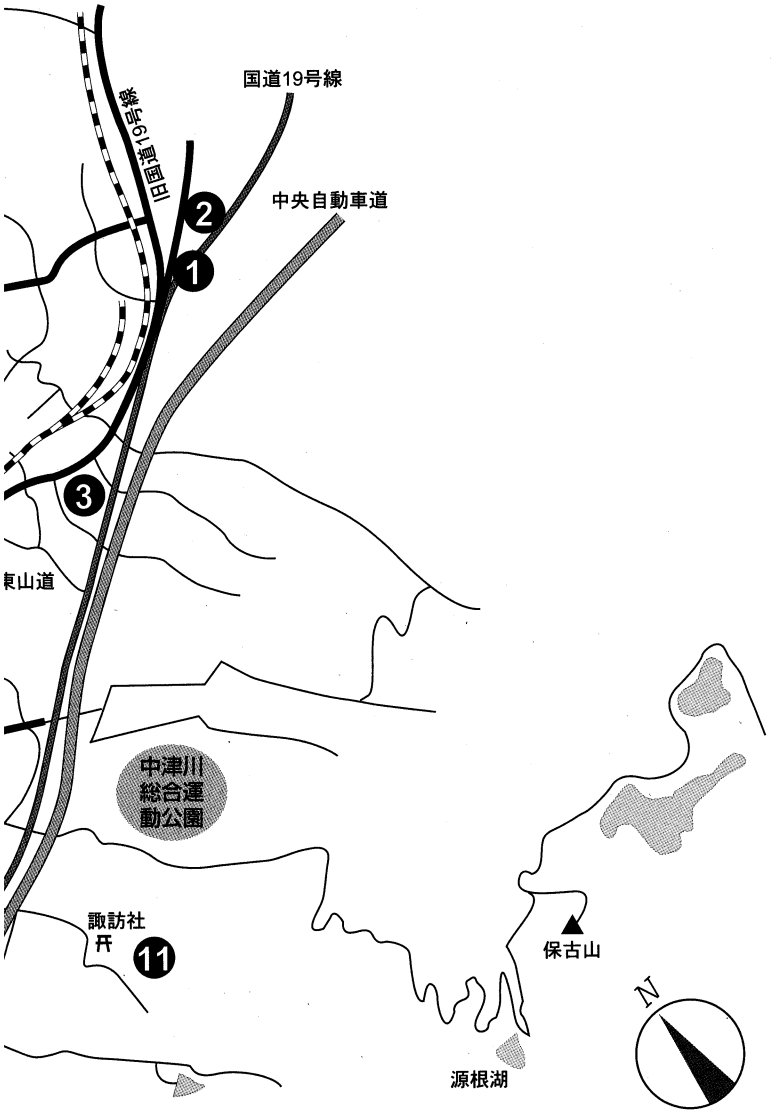
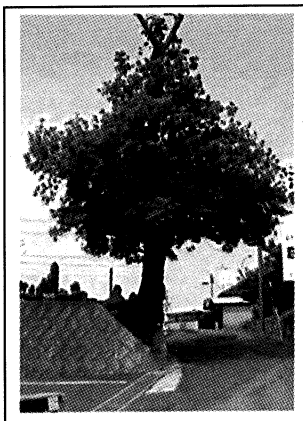
美乃坂本・中山道

一人歩きのたび

内文化財案内図



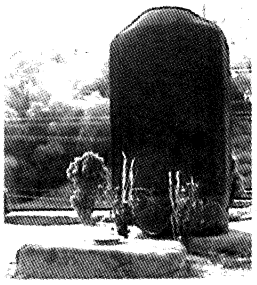


①小石塚

旧手賀野村、旧駒場村と旧千旦林村境で昔の立場である。
今では改良され、大きな赤樫の木が昔を偲ばせる。

②嵐讃岐の板碑

板碑は五輪塔・宝篋印塔とともに中世期の代表的な石塔文化財で、関東を中心に全国的に分布している供養塔であるが、この地方においては極めて少なく、中津川市内では唯一のものである。

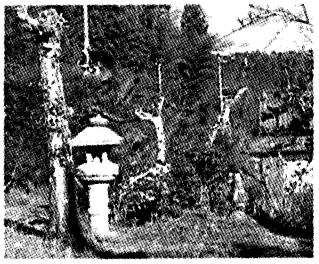


③六地蔵

大林寺の入口に明暦3年(1657)に造立。石幢は六地蔵信仰と結びつき、室町末期から普及しますが、当地では数少ないものの一つです。

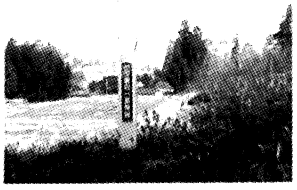
④坂本神社　八幡宮

創祀は大宝2年(702)で大山祇氏神を主祭していたが、源氏の天下統一以来源氏の氏神として応神天皇を主祭とした。中津川市文化財指定の九体衣冠束帯、二体烏帽子狩衣が奉納されています。



⑥一里塚

慶長9年幕府は東海・東山・北陸の三道を修理し、江戸日本橋を起点に各一里ごとに塚を立てさせた。これを一里塚という。この三津屋一里塚は江戸から86里である。

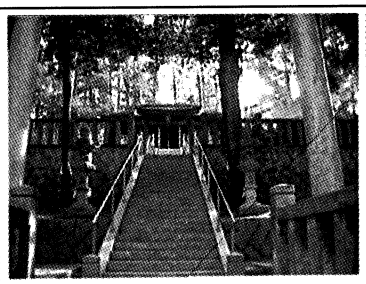


⑤将監塚

慶長18年より寛永8年の20年間美濃代官であった岡田将監の墓と伝えられています。

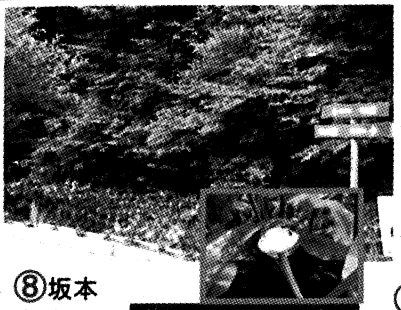
⑫長連寺薬師堂

昔この付近には長連寺という大きな寺が建っていたそうです。その寺の一角に病気に対する不安を神仏に頼ったりする信仰から薬師堂を建立した。



⑪坂本神社　諏訪社

参道はうっそうとした大樹に囲まれ、昼なお暗く清涼な風が静かに流れ、神々しい雰囲気が漂う静かなたたずまいです。この神社の創建は不詳。祭祀は建御名方命が祀ってあります。



⑧坂本立場

春には今でも残る馬の飲み水場にコウホネの黄色花が面影を残す

⑦大林寺

照庵玄光和尚が戦乱を避けて天正8年(1580)当地に開山、後洞垣外に移り元禄10年(1697)の大洪水にて諸堂は大破し、場所を南西の高台に移転再建。その後200年大正14年8月1日夕、本堂に落雷があり焼失したが、本尊(聖観音像)、過去帳等は救い出した。現在の地に山門、位牌堂などを移築し、本堂を等を再建する。

中津川市坂本地

ひとつばたご

かたくりの花

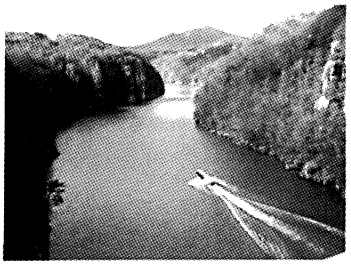
しでこぶし

国第1号
天然記念物

花の木

⑮源斎橋から恵那峡

源斎岩から少し下がった所から福岡町高山に架かる付知右岸用水の橋から眺める恵那峡、付知川の出会いは絶景である。
春の若芽、秋の紅葉、冬の雪景色は心を和ませる。

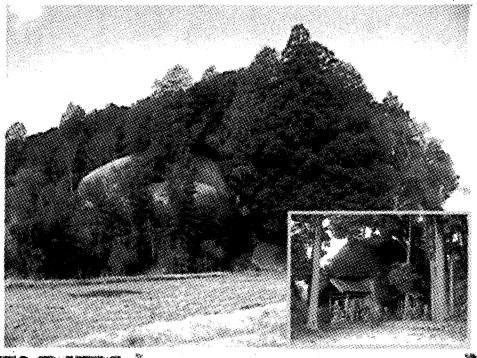


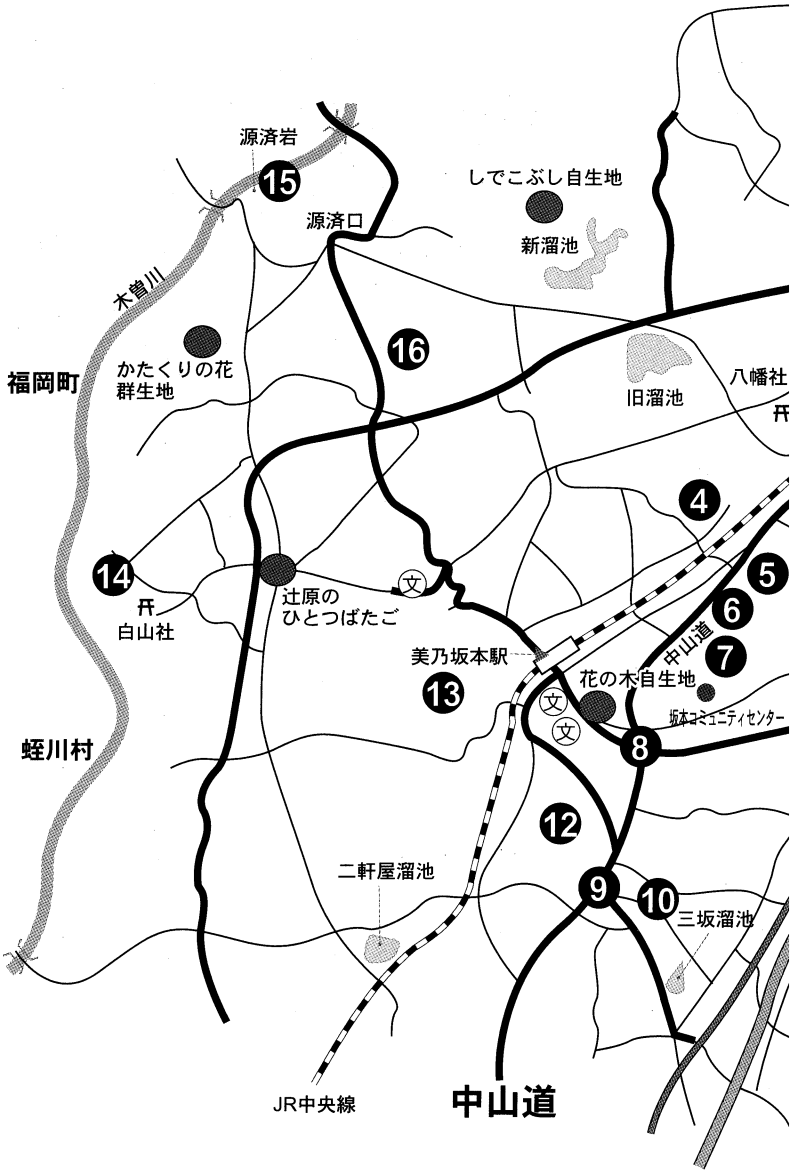
⑮源斎岩

この岩窟は永禄7年(1564)頃、吉村源斎という人物が住んでいたところから源斎岩と呼ばれています。
この岩付近から眺める恵那峡の景観は昔を偲ばせる。

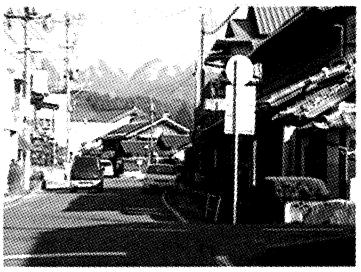
⑯岩屋堂観音

この観音堂は巨岩の下を広げて間口2間、奥行き2間半、屋根つきのお堂で創立は不詳。堂内には流麗な寄木造りの十一面観音像が安置されています。





発行：坂本歴史ボランティア



⑭辻原白山神社

美濃国土岐頼政の家来荻野五佐右衛門が辻原の里に移り一鎌の竹を植えました。1153年御所に鵺が現れ源頼政が荻野の竹で作った矢で退治し、その褒美として御矢と御太刀を拝領し、その矢を御神体として白山大権現を久寿元年(1154)8月に祀った。

⑬五百羅漢

寛政11年勝半蔵等が近隣百ケ町村の協力により寄進した羅漢像の石仏を祭った。今は129体ありますが、大半は享和(1804)年間に寄進を受けたものです。春の桜、秋の紅葉は見事です。

⑩源長寺

茄子川の中心の平地に寛永2年(1625)に開かれ、境内にはしだれ桜、樫の古木があり、恵那三十三観音の第6番札所になっている。

⑨御小休所

篠原家は代々尾張藩木曽方の庄屋を務め参勤交代のため中山道を通行する大名等の休憩所であった。文久元年の皇女和宮が江戸に嫁がれる時にこの御小休所で休まれている。また、明治13年6月明治天皇御巡幸の際もここで休憩されています。

小石塚立場跡

ここは旧手賀野村、旧駒場村と旧千旦林村境である。道を挟んで東側に加藤、野沢の両家、西側に鷹見、小木曽、市川の三家があり、この間の道路は少し広くなっていて、中山道を通行する旅人の荷を運ぶ人足の継ぎ立てを行い、加藤、鷹見は茶屋を営み庄屋の野沢家は宿屋も兼ねていたという。

中山道はここから以西は千旦林、茄子川を経て大井村岡瀬沢の村境まで四十五町三十三間（四、九六〇㍍）の内、この付近が中央道、国道バイパスなどの新設により消滅してしまった。

この立場にあった五軒の家々も近くの土地に移転してしまい、今では鷹見家の屋敷跡も整地され、新しい商店が建ち付近一帯はすっかり様変わりしてしまった。

また、村境には『恵那山道』と刻まれた大きな自然石の道標があったが、いつの頃から持ち去られ今はない。

この小石塚には次のような話が伝わる。昔ある城の姫君に恋慕された若侍がいた。若侍は叶わぬ恋と悟り国を出遊して、この地に隠れ住んでいたが病により亡くなった。彼は生前に、村に尽くし、信望を集めていたので、その徳を偲んで塚（墓）を立てて葬った。姫も若侍の出遊を知るとその後を追って諸国を流浪し、ようやくこの地を尋ね当てた時には、すでに尋ねる人はこの世になく、姫は「恋しき人よ」「恋しき人よ」と嘆き悲しみながら後を追うようにして病死した。

村人たちは姫を哀れんで墓を立て侍の墓を「恋し塚」と呼ぶようになり、いつしかこれが訛って「小石塚」と呼称されるようになったという。

享和二年（一八〇二）三月二十八日、ここを通った蜀山人（太田南畝）の壬戌紀行にも「仮橋をわたりて坂を上がればこしつかの立場なり、（藤波記に恋塚）この辺ところどころ桃花さかりなり、此立場に千旦林手金野村境といえる傍示あり」と記され、また、御分間延絵図（文化三年（一八〇三））「字小石塚」の字名がついている。

嵐讃岐の板碑

小石塚の鷹見家屋敷跡を整地した、南西の大きな赤樫の木の下に、高さ一二二チセン、幅九一チセン奥行き十五チセンの板碑が建立されている。

砂岩の平板の中央に大きく「空風火水地喝」左側に「月翁字清禅定門一三回忌辰嵐讃岐」右側には「寛永三年初夏念日孝子八男建焉」と刻まれている。

板碑は五輪塔・宝篋印塔とともに中世期の代表的な石塔文化財で、関東を中心に全国的に分布している供養塔であるが、この地方においては極めて少なく、中津川市内では唯一のものである。

その特徴は長方形の板形で頂部を山形にして、二条の線を入れ身部にはまず仏、菩薩等の種子（字）を、その傍に紀年氏名などを刻むのが基本である。

中央の空風火水地の五文字は密教の宇宙観を表現する真言種子「キャラ・バ・ア」と同じである。また紀年建立理由建立者が明らかで、父讃岐の一三回忌に当り供養のため、大日如来を主尊とする碑を子ども（孝）八男が謹んで建てたと理解できる。

この碑が建立されたのは、未だ徳川の幕藩体制が確立されておらず、実質的には中世末期のものといえる。では、嵐讃岐とはどんな人物なのか

天保三年（一八三三）辰八月、当番庄屋野沢惣右衛門が記す「八幡宮建替村中奉加覚」の文章から推察すると嵐讃岐はこの付近に住み、八幡宮の氏子総代（大檀那）となって慶長六年丑七月の八幡宮再建をはじめ、再度にわたる宮の改修に尽力したといわれ、八幡宮に近「字後屋」に讃岐内（堂）の地名が残っている。

村人から『讃岐さま』と呼ばれて、その功績がたたえられ、慶長十八年（一六一三）に生涯を終えたものと思われる。また、この供養塔をこの地に建てたのは『讃岐さま』が住んでいた処は街道筋から奥まった場所で、一人でも多くの人々に供養して戴けるのは、この街道筋でこの場所（立場）がよいと村人達が考えたものであったと思われる。

この供養塔は以前小石塚にあった五軒の家でお守りしていたが、いつの頃からか鷹見家だけで行なうようになり、毎月二回程の供養花掃除はもとより毎年四月には、赤飯などを炊いて「お祭り」を欠くことなく続けられている。

嶺松山大林寺

大林寺草創由緒之略記によれば、天正八年（一五八〇）の秋、甲斐国甲陽山清光寺の五世照庵玄光禅師が戦乱を避けて、千旦林八幡宮に留錫され、東の洞に禅洞庵を結んだが、翌九年二月に禅師は没しました。

慶長十三年（一六〇八）の春、清光寺の徳外和尚が、師の吉州和尚と同庵に住み法を説き教化に努めました。同十五年招かれて京都で法華を講説したほか、亀山城の隣松山竜泉寺、桑名の華山海蔵寺に住み各地を布教しました。元和八年（一六二二）庵に帰って禅洞寺と改めた。

また、正家の円通寺等を開創のあと、寛永十年（一六三三）春、禅洞寺が手狭のため洞垣外に移して、寺号を嶺松山大林寺と改めた。

大正１０年頃の洞垣外大林寺

五世本然和尚の時、本堂庫裡を整備し、禅堂山門東庇西廊を建てたが、元禄一〇年（一六九七）五月の大洪水でことごとく大破してしまった。

この時、村では家が十九軒もつぶれ、村の納米高五五二石六斗二升の内被害高三六九石余などの大被害であり、その後も毎年のように水害に遭うので、七世玄定和尚は享保三年（一七一八）南西の高台に移転再建を図った。

その後二〇〇余年間災厄に遭うこともなく、当地方有数の禅刹として、崇敬を集めていたが大正十四年（一九二五）八月一日夕、本堂に落雷があって本堂と庫裡を全焼し数多くの仏像や貴重な品々を焼失した。

辛うじて山門、倉庫、位牌堂は難を逃れ寺の人々は必死の思

現在の大林寺山門

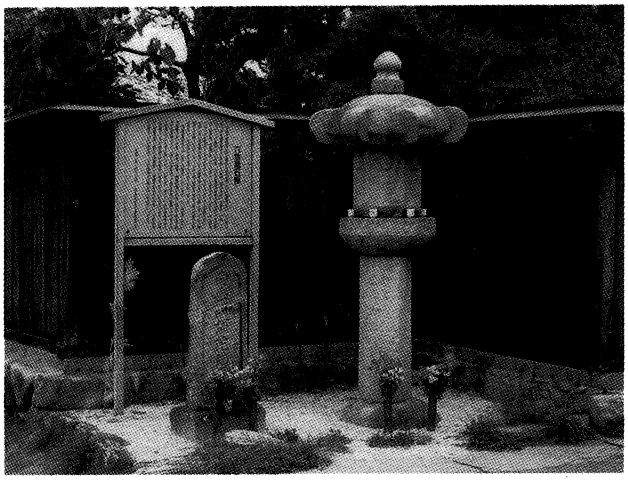
いで、本尊（聖観音像）と過去帳等を救い出したという。

九世龍禅和尚は交通の便などを考え、村の中心部に近い中洗井字福田（供奉田）に再建を図り昭和二年以来完成までに一〇年の歳月を要した。

六地蔵石幢

寺院や墓地の入口に置かれる石碑がこの六地蔵にあり、ここでは南へ一〇〇メートル程参道を入った所に大林寺（現中洗井）が寛永一〇年（一六三三）に創立しています。

この石幢は大林寺の入口として寺の創立二十四年後、明暦三年（一六五七）に造立されています。

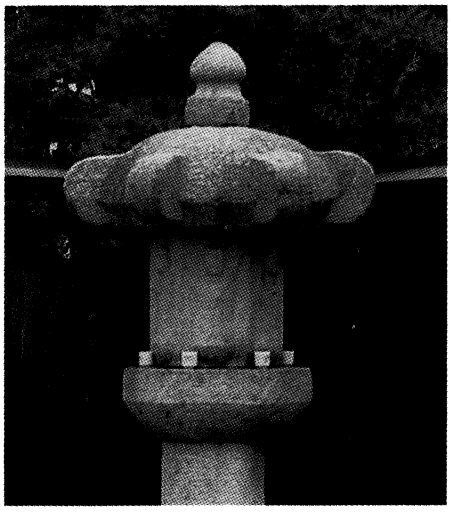


中山道から寺への分岐点に建てられたのは、その入口としての役割と共に、当時しばしば見舞われていた水害を佛にすがって避けることと、娯楽往生を願うものでした。

その上、中山道を行き交う旅人が道中の安全を祈り、心の安らぎを得ていくためでもありました。

地蔵菩薩は古くから多くの庶民に親しまれ、広く信仰されている仏像であります。釈迦入佛後、無佛の間この世に現れて衆生を救済する菩薩とされ、常に六道を巡って衆生を救い極楽へ行けるよう力を貸してくれると信じられていました。更に六つの分身を考えて六地蔵としての信仰が平安末期に始まったといわれています。

石幢は六地蔵信仰と結びつき、龕部（ガンブ）に六地蔵を彫るものが多く、室町末期から普及していますが、この地域では数少ないものの一つです。



松風義校（千旦林学校）跡

明治五年に発布された学制にもとづいて、明治六年（一八七三）五月、中津興風義校（南小学校）の三番支校松風義校として開校されました。

千旦林六番地所に一舎を造営し、旧大林寺佛宇を借りて授業が行なわれました。教員は松山桂舟、松山文舟及び小畑（某）でした。

生徒数は男子四十五名、女子十八名でした。教科書は三字教、稽要略、千字文など漢文を使用していました。

明治八年（一八七五）八月、中津興風義校より分離独立。明治十三年（一八八〇）一月、与ケ根の木村弥一郎氏の空家を借り受け加藤作之助を招き新式の学校としました。

明治十六年五月、八幡神社の大門にて元の正覚院屋敷跡（祈願所ともいう。）に間口七間半、奥行き四間半、二階造りの校舎を新築しました。

明治三十四年（一九〇一）四月、高等科を併置して千旦林尋常高等小学校と改称しました。

明治三十五年中平に校地を移転し新校舎を落成しました。

将監塚

岡田将監善同は慶長十八年（一六一三）より寛永八年（一六三一）第二代目美濃代官でありました。善同は織田信長に仕え、加藤清正に従って加藤姓を名乗ったことがありましたが、関ヶ原戦では東軍に属し、慶長六年（一六〇一）六月采地五千石を与えられ、可児郡姫村に住み、慶長一〇年（一六〇五）からは初代美濃代官であった大久保長安の配下であったが、長安の死去により二代目美濃代官となりました。当時大井村には名古屋築城の際の材木番所があり木曽材持出奉行として、当地方に駐在していたようです。

善同の子善政も寛永八年父の死後美濃代官を勤め、天保二年（一六四五）には幕府の命により、美濃国図を調整して提出しました。

恵那郡史には坂本村千旦林に岡田将監の墓

と伝えるものが間地三ツ屋地内にあって旧中山道の北の一小丘で五輪の石塔（実際は宝篋印塔）が建っている。

これを「ショウグン塚」と呼んでいるが将監塚の訛伝であろうと記されているし、併せてこの付近には将監乗馬の塚と云うのがあり、地名を岡田ということも記されています。

坂本立場跡

坂本立場跡は中津川市が建てた「坂本立場跡」の碑が昔の在り処を示しているが、わずかに立場の名残といえば、馬の飲み水用に掘られた小さな池が山際に残っている。

この立場は繁沢家がその業務を営んでいたが、今は繁沢家もここになく屋敷跡もその裏手にあった。溜池も埋立てられて草原となっている。

また、ここには家が五軒ほどあり、中津川宿へ一里六町あり旧千旦林村と旧茄子川村の境にあたる。時は移り明治政府によって、助郷・伝馬の制度が廃止されてからも、繁沢家は運送業を行っていた。

明治十七年より明治二十二年までの官選戸長役場は繁沢家の一室を借り、千旦林村、茄子川村聯合村役場の業務を執行するための施設を整え、入口には両村聯合村役場の高張提灯が掲げられていた。

明治二十五年旧坂本村役場が完成するまで此処に役場が置かれ、明治三〇年坂本村が誕生するときの両村組合長（村長）は当主繁沢仙之助であった。

春には今でも、残る馬の水飲み場にコウホネの黄色い花が面影を残す

尾州白木改番所跡

番所跡はこの石柱の立っている処ではなく、少し東の山田哲男さん方の裏手で、今では畑となっている。同家の西側に小道がある。この道は下洗井に通ずる古道で、第二野田川に架かっていた、木橋は河川改修で新しい橋となったが、土地の古老の願望で昔のままで「御用橋」と称することになった。

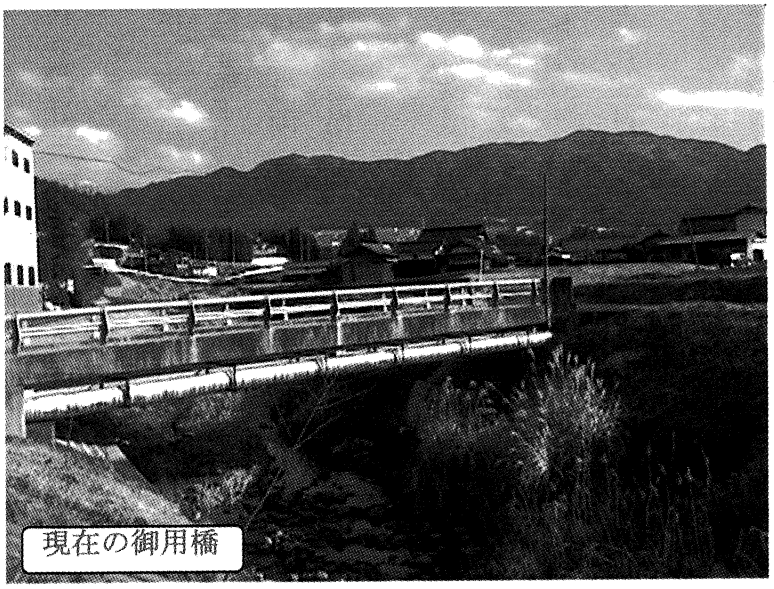
この番所がいつ設けられたかは詳しい記録はないが、享保十六年（一七三一）尾張藩が茄子川下洗井に「川並番所」を設置した記録があるところから、これに対応して設けられたものであろう。

木曽谷が尾張藩となったのは元和元年（一六一五）で、それまで幕府直属の木曽の代官であった、山村氏は尾張藩の附庸となったが、木曽支配と木曽川、飛騨川（南部下流）及び錦織網場（加茂郡八百津町）支配は元の通り山村氏であった。

木曽の山から伐採した材木の輸送は豊臣秀吉が木曽を直轄地として、所領していた時代から重量材（原木）は木曽川を利用して流送し、軽量材の榑木、土居等白木類は牛、馬による駄送の方法がとられていた。

木曽川筋にには各所に「川並番所」が中山道には「白木改番所」が設けられ、ともに錦織役所の支配下にあって、抜け荷の監視と量目の点検など厳しい取締りが行なわれた。

一本流しの材木は錦織網場（別称錦織涛）で筏に組み沖乗り役によって、木


現在の御用橋

曽川を下り陸送の白木類とともに名古屋の熱田（白鳥）に集め江戸へ船積みされた。

木曽谷や裏木曽は良材の産地として知られ、伊勢神宮の二年遷宮用材も奉採され、湯舟沢山でも前後八回にわたって採伐され、南木曽町三留野の対岸の山は伊勢山と名付けられた。

明治四年（一八七一）廃藩置県の措置に伴ないこれらの施設は廃止された。

長連寺薬師堂

この薬師堂のある付近は字名長連寺といいますが、昔、ここには長連寺と云う大きな寺が建っていたそうです。これを建立したのは織田信長に仕え、天正十年（一五八二）岩村藩主となった森蘭丸であると云われていますが、建立してから五、六年後、兵火のため焼失したと伝えられています。

医学の発達していなかった時代には火災の不安と同様、病気に対する人々の不安は常に生活の中にありました。そうしたことから神仏を頼りに信仰することによって、それから救ってもらうと、ここに薬師堂を建立したものと思われます。

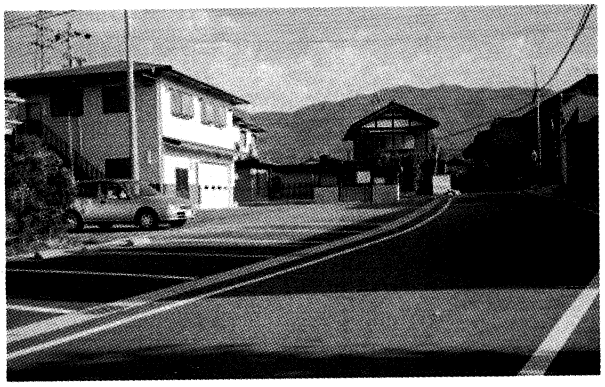
薬師は薬師瑠璃光如来といい、人間世界の救主であって浄瑠璃光で衆生の病苦を救う如来です。堂内の厨子に薬師如来木像と他に仏像三体、弘法大師一体その他。閻魔大王とその類と思われる木像十数体がありますが、大東亜戦争後何者かによって銅製仏像を始め保存の文献等殆どが盗まれてしまい、造立の頃のことは不明であります。

省慎義校（茄子川学校）跡

明治五年（一八七二）学制が発布されて、翌六年五月、中津興風義校（南小学校）が設立されると、その四番支校として省慎義校が、茄子川村三番地所（中町）の渡辺喜蔵方の一室を借

りて開校されました。「道生舎」ともいい、生徒数は男子六十六名、女子五十八名で教員には林準一郎・塩塚通庵・久翁亮英・鈴村茂十の他、取締は倉田万之進でありました。

明治八年（一八七五）、中津興風義校より分離独立して源長寺を仮校舎としました。明治十五年（一八八二）十月、この地に校舎を新築して移転しました。その間、名称も明治十三年に茄子川学校と改まり、明治十七年には中等科を併設しました。明治十九年に茄子川簡易学校となり、明治三十三年（一九〇〇）に茄子川尋常小学校と改称しました。



明治三十四年高等科を置き校舎が狭くなったので新校舎を建て、明治三十七年には農業補修学校併設しました。茄子川村と千旦林村が合併して坂本尋常高等小学校となったのは明治四十一年（一九〇八）十月のことです。

合併する前の一年間は茄子川と千旦林の児童生とが仲良くやってゆくために半数の者が互いに相手の学校へ通い、友情を深めたと聞いております。

茄子川御小休所

旧茄子川村の中心地の街道通りの中山道を西に向かって、秋葉道（旧国道）の手前左側の篠原家の西門前に「明治天皇茄子川御小休所附御膳水」の石柱が建てられている。

篠原家は代々尾張藩木曽方の庄屋を務め、参勤交代のため中山道を通行する大名等の休憩所として、茄子川小休本陣と酒造業（西酒屋志乃原）を営んで来た土地の素封家である。

当家の系譜によると、初代篠原弥右衛門は加賀初代藩主前田利家の重臣であった。

篠原出羽守一孝の末孫で慶長

十九年（一六一四）の大阪夏の陣に父出羽守とともに徳川方で出陣した。戦後茄子川の地に居を構えて帰農し、茄子川篠原家を創立したのが始まりという。やがて弥右衛門は長八郎と改名して、十三代まで長八郎を襲名し、現当主求氏は第十六代目にあたる。また、当家には「御休宿並御休記録」が二冊保存され、第一号寛政から文政は八代目、第二号天保から慶応は九代目と十代目の筆によるものである。

中山道は皇族や公家の姫君が将軍や水戸家に嫁がれるとき、通行されたことから「緋の道」といわれている。記録に残されている姫君の通行は、享保十六年（一七三一）から文久元年（一八六一）までに八名を数え、そのうち文化元年の楽宮（ササノミヤ）・嘉永二年寿明君（スメギミ）・文久元年皇女和宮がこの小休所で休まれている。

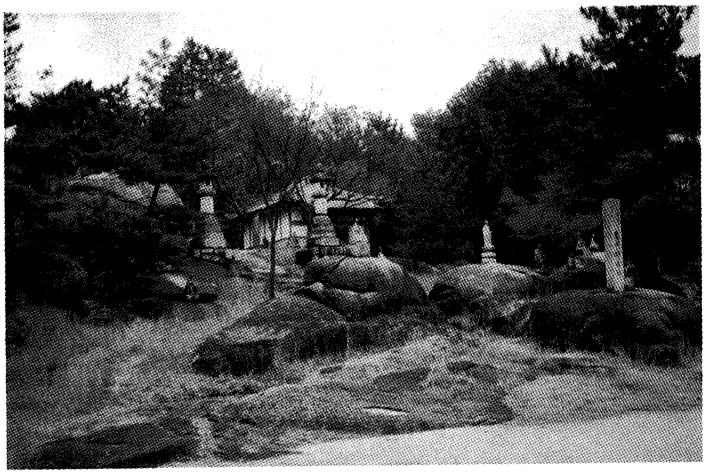
また、明治十三年（一八八〇）六月明治天皇御巡幸の際もここで休憩されて、池の鯉がお目にとまり蚕の蛹（むつご）を与えてひとときを興ぜられたとの逸話がのこっている。小休所は表門と玄関、六畳と八畳の二部屋、廊下とかわやを備えてあり、御用向きの都度、尾張藩の勘定奉行や作事奉行が検分した事が詳細に控書に記載されている。

特に和宮の通行はその規模も桁外れのもので前代未聞というほどであった。

篠原家ではその折、新築された表門のほか、休息の部屋も当時のまま誠実に保存されて、昭和十年文部省より史蹟に指定されている。

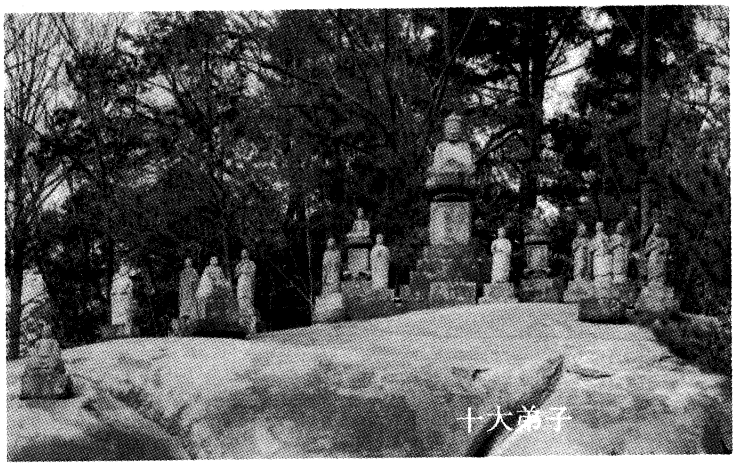
寺居山五百羅漢

寛政六年（一七九四）七月上総の国（千葉県）の森岩寺の前住職越山和尚が知人である中切勝半蔵方に立ち寄った折に、松林と岩山の景勝地、寺居山を紹介されました。ところが和尚が寺居山を尋ねますと、この山中に仏の御姿を彷彿と拝願いしたので、是非念願の五百羅漢石佛をこの地に建立したいと発願し、直ちに尾張藩に開山の願いを出したところ、寛政十年（一七九



八）四月許可が出されましたが、残念ながら越山和尚はこの世を去っていました。

勝半蔵は光岡太郎右ヱ門の協力を得て近隣百か町村にこの趣意書を配り、勧進喜捨を求めたところ、次々にご寄進があり、岩の上に石佛が建てられました。

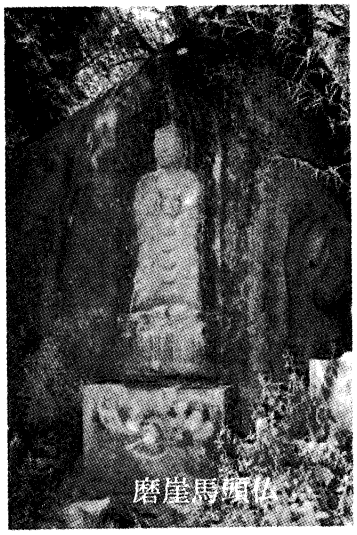

十大弟子

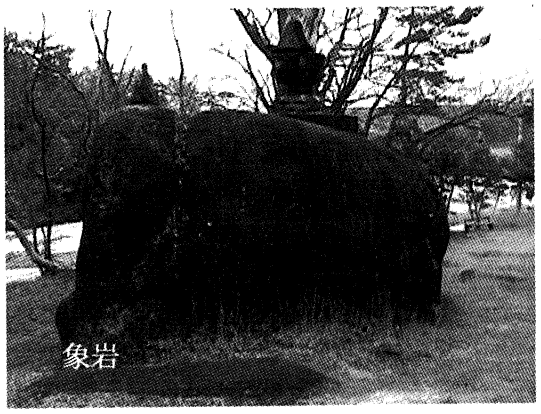
開山の準備も整い越山和尚の弟弟子大義和尚が導師となり、近在の僧侶三十名、近隣の善男善女が境内を埋める中で、寛政十一年（一七九九）四月二日開眼供養が行われました。

なお、翌十二年十二月恵月庵（後の弘法堂）が建立され石佛の供養をしました。

現在石佛一二九体ありますが大半が享和年間（一八〇四頃まで）に寄進を受けたものであります。寛政十一年大井長国寺住職天輪和尚が漢詩に託した景勝十二景があります。

一　耆闍堀（キジヤ）　二　円通台　三　西浄殿
四　降臨松　五　東旭嶺　六　神馬場
七　黒獅岩　八　清瀧水　九　銀沙庭
十蝦蟆石　十一　隔塵橋　十二　行者洞


磨崖馬頭仏


象岩

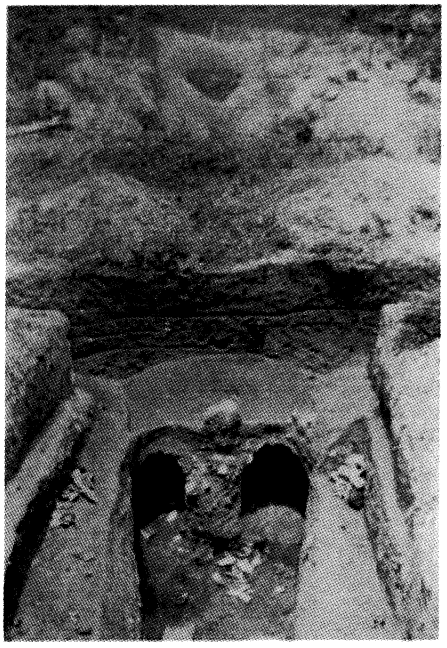
中洗井北第一号窯跡

この付近は鎌倉期から室町期の大窯跡が多く瀬戸系統の片口鉢や皿類、小茶碗など常滑系統の大甕類が出土しています。

昭和三十三年五月名古屋大学楢崎彰一教授によって発掘された古窯を北第一号窯として文化財に指定されました。この窯は地山をくり抜いて造営されたもので殆ど原形のまま発掘されました。

燃焼室、焼成室、煙道、外部施設の四部に分かれ分焔柱を持った全長十三、一メートル、最大幅二、五メートル、高さ九〇センチ緩勾配の窯です。

現在は冬の冷害、風水害で破損が酷くついに平成七年十一月に埋め戻し現在は地下に眠る史跡となっています。

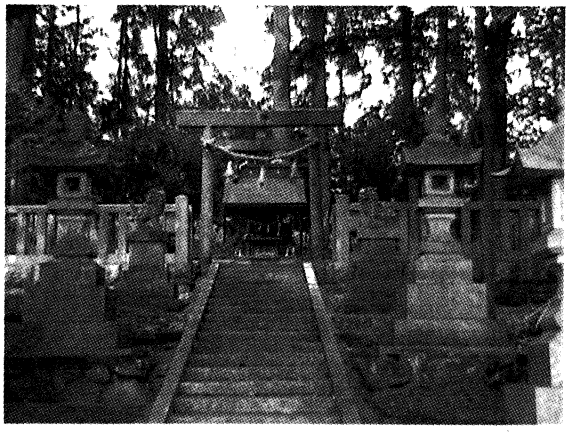


辻原白山神社

この神社の由来については、荻野家の古文書によれば、「美濃国土岐郡土岐頼政の家来荻野五佐右衛門次清、久安元年（一一四五）に辻原の里に移り、一鎌の竹を植え荻野藪と名付けました。第七六代近衛天皇、仁平三年（一一五三）御所の清涼殿に鵺（ぬえ）が現れ、源頼政が荻野藪の一鎌の竹で鵺を退治し、その褒美として御矢と百足丸の御太刀一腰を拝領しました。右御矢を御神体として白山大権源を久寿元年（一一五四）八月朔日に祀りました。

その後、再建の記録によれば正治二年（一二〇〇）建長六年（一二五四）文保元年（一三一七）永享七年（一四三五）長享二年（一四八八）慶長八年（一六〇二）となっている。再建・修理の記述のある棟札は二十八枚が残されています。

白山神社の名称は明治元年（一八六六）の「神仏分離令」以



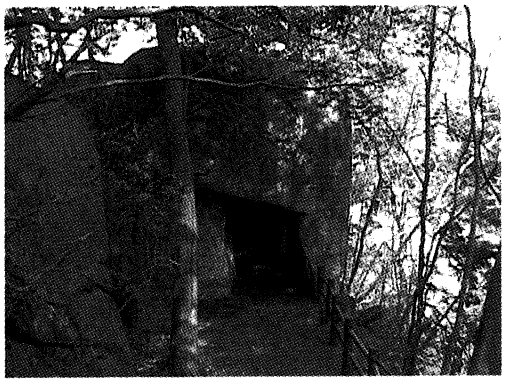
後「白山神社」と改称されることになりました。さらに昭和五十一年（一九七六）には白山本宮加賀一の宮白山比咩神社から分霊を受けて、御神体は神鏡で（創建以来の御矢二本は戦後いつの日か紛失していた）祭神は伊弉諾尊・伊弉冉尊・菊理媛命の三社が祀ってあります。なお、境内には脇宮として洲原社・縣社の二社その他の小祠として山之神・津島神社・天満宮・秋葉社・多度社の六柱が祀られています。

源斎岩

この岩窟は永禄七年（一五六四）頃、吉村源斎と云う人物が住んでいたことから源斎岩と呼ばれています。

吉村源斎は幼名を太郎左ヱ門といい、後に氏勝と称し、源斎はその別名で、それの系譜は詳かでありませんが、知謀抜群、特に腕力に秀でておりました。

付近の原野を開墾して食糧を蓄え、世の動向をうかがっていました。



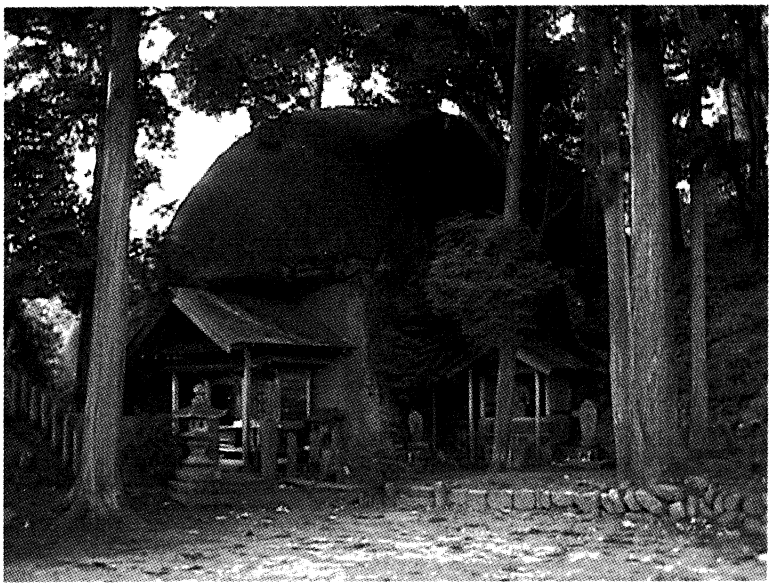
この時代は戦国の世で、甲斐の武田信玄は美濃を占領し、京都へ進出する意図をもち、源斎の名を聞き、報償を与えることを約して味方になることを奨めたが、源斎はこれに応じなかったので、信玄は怒って軍をもって攻め、この砦を焼き、源斎はこのとき戦死したと伝えられています。その子七左ヱ門尉氏為別名源蔵はのがれて、苗木城主遠山久兵衛友政を頼り家臣となり、千旦林城を守り、千旦林を領有していましたが、元亀三年（一五七二）八月、武田軍の将、秋山晴近と上村で合戦し、戦死したと伝えられています。

源斎の死後近郷の住人たちはその徳を偲び、源斎大明神として崇め、毎春四月十五日を祭典として今日に続いています。

源斎公園から見た恵那峡

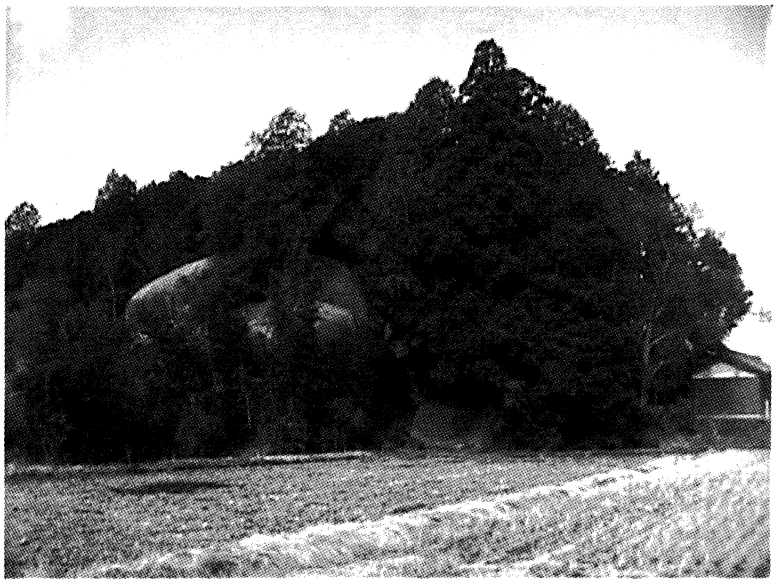
岩屋堂観音と石仏群

この観音堂は巨岩の下を広げて間口二間、奥行き二間半、屋根付きのお堂で、創立は明かではありませんが、堂内に残されている棟札のうち、最も古い棟札には寛文十二年（一六七二）十二月二十五日、千旦林大林寺の第四世住職青山秀叟師の名が記されてあります、同師が供養されたことは明らかであります。



堂内の大形厨子には流麗な寄木造りの十一面観音像が安置されております。

また、堂内にある棟札には大林寺の歴代住職の名が記され、延宝五年（一六七七）尾張藩への書上帳によれば、岩屋山昌久寺と称し寺領田七畝（六九三㎡）の内二畝歩は山村甚兵衛、五畝歩は山村八郎左ヱ門が寄進されたもので、それ以来この巨岩を含め付近は現在も大林寺寺領として登録されており、毎年一月十日、大林寺住職による法要が執り行なわれています。



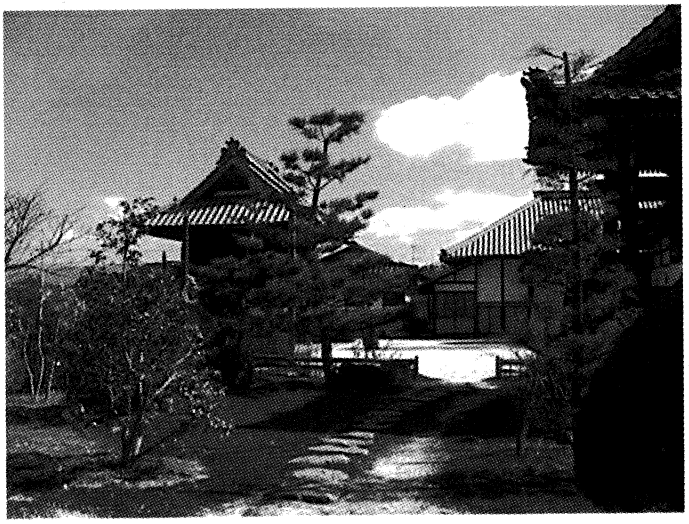
久翁山　源長寺

源長寺は茄子川のほぼ中央に位置し、北に御嶽・東に恵那山・西に笠置山が遠望できる景勝の地にあり、江戸時代の五街道の一つである中山道の茄子川集落の南側に建てられた禅寺である。

寛永二年（一六二五）恵那市大井町長国寺の三世鷲州應鷲大和尚によって開かれ、以後三百六十余年続いて今日に至る。

千余坪の境内には本堂、庫裡、山門、位牌堂、書院、鐘楼、弘法堂等が建ち並び、中でも本堂は寛延四年（一七五一）の再建、山門は鐘楼門で天保十五年の建築である。専門家の調査によると須弥壇に古い須弥壇形式が残っているということである。

寺宝には成瀬誠志（郷土の陶芸作家）の香炉・花瓶一対などがある。



茄子川焼（広久手）

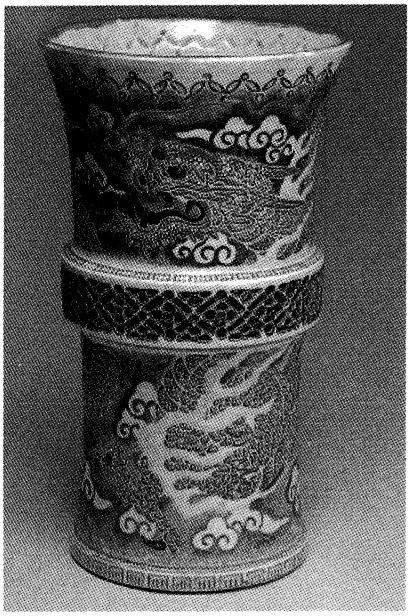
茄子川焼は天正八年頃、旅人（瀬戸の加藤四郎の末裔といわれています）が陶土質の禿山を発見し後より地元民の協力を得て始めたといわれています。

天保二年（一八三一）茄子川広久手の丹羽九右衛門という人が茄子川焼を再興しました。それまでに茄子川地内で施釉陶器の製造が試みられましたが実を結ぶまでに至りませんでした。九右衛門は翌三年には土岐郡妻木村から加藤嘉兵衛という職人を師匠として迎え、指導をうけて、事業の充実を図ろうとしましたが、同四年頃から干ばつが続き飢饉となったのでこれを廃止しました。次いで八年から篠原利兵治が同じ広久手で陶器をつくり始めました鯉ケ平においては主に陶器が焼かれ、陶土に鉄粉を混ぜた焼物（主に湯呑類）で奥州の相馬焼きに似ていたため、「茄子川相馬」と呼ばれています。

西諏訪においては深山より長石を出し、原料として、主に磁器が焼かれていました。窯が三ケ所に分かれたのが創始後およそ二百年程でした。その頃が最盛期でした。村の重要産業として明治末期まで続きました。

金彩造花瓶

成瀬誠志・明治４２年頃作



ラッパ型昇龍文化瓶

成瀬誠志・明治３９年頃作

発行：坂本地域まちづくり推進協議会
監修：坂本歴史ボランティア